

#007 お天気雑記帳

晴嵐

中国と日本で意味の異なる漢字があります。たとえば、中国語の「愛人」を日本語に訳すと「妻」になります。「娘」は「お母さん」、「手紙」は「トイレトペーパー」、「鮎」は「なまず」。これらは有名ですから、ご存じの方も多いと思います。

気象の世界でも同じような例があります。中国語の「嵐」は、もともとは「霧」を意味していました。日本に漢字が伝わった時、風のアラシに「嵐」の字をあてたため、混乱が生じました。今では死語となった「晴嵐(せいらん)」、この言葉の意味が時代によって大きく変わっています。

「瀟湘八景」は、中国湖南省の洞庭湖付近の8つの風景(瀟湘夜雨・平沙落雁・烟寺晚鐘・山市晴嵐・江天暮雪・漁村夕照・洞庭秋月・遠浦帰帆)で、10～11世紀ころから書画に描かれるようになりました。鎌倉時代に中国の書画が日本で珍重されるようになり、近江八景の粟津晴嵐(滋賀県大津市)、金沢八景の洲崎晴嵐(横浜市金沢区)など全国各地に晴嵐のついた新たな八景ができて、晴嵐という言葉が一般に知られるようになりました。瀟湘八景の山市晴嵐は静かな山里の朝霧なのですが、当時の人たちがこの意味を理解していたかどうかは疑問です。

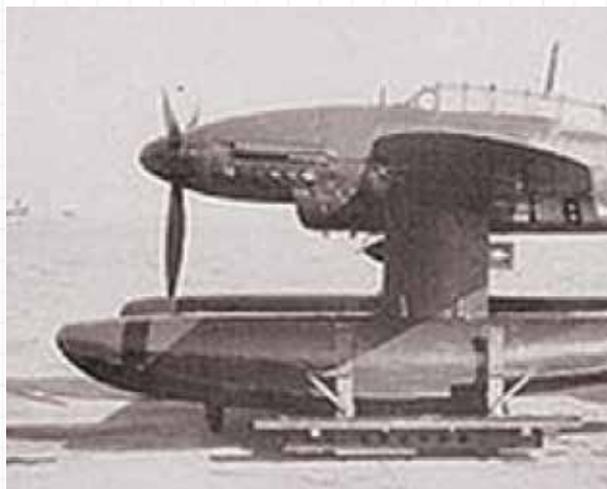
慶長8年(1603)にイエズス会の宣教師たちが編纂した『日葡辞書』には、晴嵐が「雨や雪を伴わない風だけの嵐」と解説してあります。このころには、「霧」から「風」に変わっていました。

江戸時代の浮世絵には、粟津晴嵐や洲崎晴嵐が夕焼けのように描かれています。水墨画に描かれた霧の「ぼかし」に色をつけたため、このようになったのではないのでしょうか。そのためか、このころの人たちは晴嵐を「夕焼け」と思っていたようで、明治22年に国語学者・大槻文彦が発行した『言海』では「ユフヤケ」となっています。



金沢八景 洲崎晴嵐 (広重)

ところが、大正時代になると晴嵐の意味がまた変わります。国語学者・落合直文が大正10年に発行した『言泉』では、「晴れた日のかすみ」に変わっています。中国の言葉の研究が進んだことから、もともとの意味の「霧」に変わったのだと思います。ただ、この意味で使っていた人はいなかったのではないのでしょうか。



フロートをつけた「晴嵐」の試作機

太平洋戦争時、米本土攻撃を目的に、潜水艦から発進できる特殊攻撃機と、それを搭載する大型潜水艦が開発されました。この攻撃機の名は「晴嵐」。「晴れた日の突如の嵐のように、敵の不意をつく」という意味で命名されました。

大西洋の米艦隊がパナマ運河を通過して太平洋に進出するのを防ぐために、開発に着手した昭和18年からパナマ運河の閘門を破壊する計画がありました。パナマ運河近くの海上に浮上して、搭載した2機の攻撃機を組み立てて発進するまで、わずか10分。パイロットには、魚雷を積み、それを水路に投下して閘門を破壊し、潜水艦の近くに胴体着陸して帰還する作戦と説明されていたのですが、実際は爆弾を積んで特攻する作戦でした。

攻撃機を製作していた工場が地震と空襲で被害を受けて完成予定が遅れ、戦況がさらに悪化したため、攻撃目標を南太平洋のウルシー島に集結していた米海軍艦艇に変更しました。攻撃予定日を昭和20年8月17日と決め、終戦直前に2隻の潜水艦が出航しました。洋上で終戦の報を聞き、攻撃機を海中に投棄して帰還したため、この攻撃機が世に知られることはありませんでした。もし、この攻撃機がパナマ運河や米艦艇を攻撃していたら、「晴嵐」が違う意味で現在も記憶に残っていたと思います。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 松嶋 憲昭